

山村の農家庭に関する研究 III

—— 長谷村非持地区を事例とする農家敷地の庭園化の総合考察 ——

伊 藤 精 昭

信州大学農学部 空間利用整備学講座

Study of Farmer's Gardens in Mountain Villages III

—— Garden in Agricultural Plots,
in case of the Hiji Area of Hase Village ——

Seigo ITOH

Laboratory of Landscape Architecture Department of Forest Science,
Faculty of Agriculture, Shinshu University

Summary

In Study I of Farmer's Gardens in Mountainous villages, various forms of the buildings and borders were looked at. In Study II the hobby lifestyle on farms was looked at, showing how each family member enjoyed the garden in their own way and how by the variety of plants, the preparation and care taken, that as a hobby the skills were high and that the gardens provided both a practical and psychological role in farm lifestyle.

In this study we examine how these gardens develop, not often from a new plan, so much as are a natural development into garden space of vacant land left after positioning of buildings and the necessities of farm work have been established. We also examine how there are changes from farm land to housing land and how this changes the use of plots to gardens.

The space for gardens depends on the placement of buildings. The use of space between buildings and borders for gardens, and the change of vacant and working gardens to pleasure gardens have been seen in the last 20 to 30 years. This is relative to an increase in leisure hobbies. Gardens can be divided into entrance, work, front and back, laneway and kitchen gardens. Half of the work gardens became front gardens, while half remain as work gardens. Rear gardens have been made historically but we can now see an increase in the number of front gardens being made. The kitchen garden contains the clothesline and a washing area. In the gaps between buildings and roads we can also see gardens being made. We can see the influence of family members on the

placement and use of gardens in the separation of gardens into entrance, work, front, back, laneway and kitchen gardens. We can conclude that the original form of farm gardens remains, while new garden development emphasises modern lifestyle and hobbies.

(Jour. Fac. Agric. Shinshu Univ. 31: 73-86, 1994)

Key words : agricultural plot, garden, mountain village

は じ め に

山村農家の敷地と農家の庭園趣味について、これまでの研究ⅠとⅡで、長谷村非持集落の実態を分析してきた。今回は研究Ⅲとして、敷地の変化に対応して、庭園趣味の実態として庭園が敷地内のどの位置に作られているのか、また、その原因は何かを考察し、アンケート調査分析の最終編とするものである。研究Ⅰにおいて、敷地内の建物配置において7つの型が見られ、境界は6つの型が見られた。こうした型の原因として、伝統的な農家の建物配置、気候との関係が分析されたが、農家における農業の比重低下と集落社会の関係変化が、新たな建物の建設と無用の建物の取り壊し、境界構造物の設置などに、現代的な変化が見られることが明らかとなった。研究Ⅱにおける、農家の趣味生活の実態分析では、家族構成員のそれぞれが多様な趣味を持ち、生活を楽しんでいるが、中でも庭園に関連した趣味はすべての家族に持たれており、また、家族内で趣味の持ち方が相違していることが明らかになった。庭園趣味の実態として庭園に使われている植物の種類は多く、維持管理や栽培も自前で行うことの多い点で、趣味の程度は高いものと言えた。また、庭園の役割として、生活の実用を含めた心理的楽しみの効果が複合的に期待されていることである。

今回、研究Ⅲでは、家族の庭園趣味の諸形態が、敷地の中でどのような配置で見られるのかを明らかにしたい。農家庭は新たな敷地計画のもとに作られることは少なく、元来の農作業のための庭を別として敷地境界と建物配置によって生じる空き地が庭園趣味の場に展開してきたことが考えられる。また、農家が農業主体から住宅主体に敷地を利用するように変化しており、この機能面の変化と庭園化の関連も明らかにしていこうと考える。

調査方法と対象は研究Ⅰに含まれるアンケートであり、長野県長谷村非持地区を対象としている。既に研究Ⅰ、研究Ⅱでほとんどの質問項目の結果を分析しているが、敷地の見取り図、庭の利用、庭園設備の建設については未だ取り上げていない。今回、建物配置と関係する敷地内での庭園部分の配置を明らかにし、家族の庭園趣味の展開としての利用と設備との関係を取り上げ、総合的な分析を試みたい。

庭園設備と生活設備の配置

1. 庭の生活設備と庭園設備

庭の利用は農業生産面、生活面、趣味面にわたっているが、農業生産面と生活面の施設としては付属建物が該当している。建物戸外部分にさらに小施設としての設備が存在するが、生活面と趣味面の設備がある。趣味にも戸外で設備を伴うものとなると庭園部分として計画

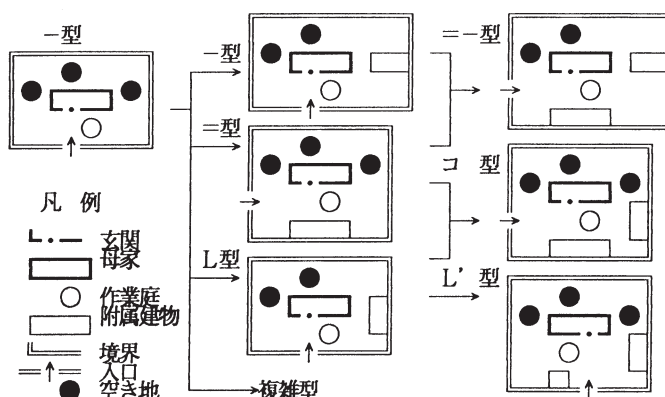
表一 庭園設備・戸外生活設備と敷地規模

敷地面積 坪	回答数 戸	庭園施設												生活施設							
		庭木	花壇	山野草	盆栽鉢	池	流れ	庭石	築山	藤棚	灯籠	手水鉢	芝生	物干し	焼却場	舗装	洗い場	湧き水	井戸	用水路	
50	6	6	3		3	2	1	4	2	1	3	1	2	1	2	1	2		1	2	
100																					
150	15	15	8	3	6	4	1	1		1	1	1	1	4	4	1	10		2	2	
200	16	15	10	8	7	6	1	8	4	3	2		3	5	5	3	8	1	2	1	
250	10	9	5	4	5	5		6	2		1	1	1	2	1	2	5	4		1	
300	5	5	4		2	2	1	4	2		3	1	2	1	4		3	2		1	
不 明	6	6	1	2	4	1			1					1	1		3		2	1	
計		53	27	16	25	19	4	23	11	5	10	4	9	14	17	7	31	7	7	8	

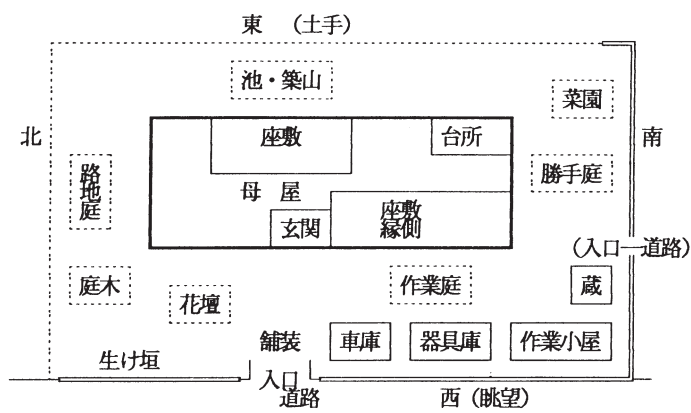
的に整備されるようになる。しかし、敷地の大きさによって戸外部分（庭）の範囲が左右され、庭園部分の整備も制限されると考えられる。「研究Ⅰ」⁽⁴⁾で昭和30年代に附属施設は敷地の大きさに関わらず蔵に加えて平均2棟存在し、それが現代には敷地規模が150坪以上で平均3棟となり、1棟のほとんどが車庫となっていることがわかった。敷地規模100坪では変化していない。すなわち、広い敷地では車庫が建った分だけ空き地は狭くなり、その他は全般に変化していないと考えられる。農家に必要な蔵、農器具庫、作業小屋がどこにも見られ、新たに車庫が建てられている。薪小屋、外便所は少なくともなくなったであろうが、まだ、残されている所があり、家畜小屋、鶏小屋はずっと少なくなっている。一方、ビニールハウスを敷地に造っている所が増えている。空き地としては昔も現在も変わっていないようであるが、その空き地としての庭が作業庭として使われる比重が少なくなり、生活の場、趣味の庭園の場となっていることが観察される。そこで、表一1に敷地面積と庭園部分、生活設備を整理した。

庭園設備として、調査回答58戸の内、庭木は53戸に存在すると答えられており、続いて、花壇27戸、盆栽と鉢物25戸、庭石23戸、池19戸、山野草16戸、築山11戸、燈籠10戸、芝生9戸、藤棚5戸、流れ、手水鉢それぞれ4戸となっている。生活設備では洗い場31戸、ゴミ焼却場17戸、物干し14戸、湧き水、井戸がそれぞれ7戸、用水路8戸で舗装が7戸である。庭木は敷地規模に関わらずどの家にもほとんど存在している。花壇もほぼ半数にあり、敷地規模とは関係ない。盆栽鉢物も同様であるが、やや広い敷地の家に多いようである。庭石となると100坪と150坪の敷地規模で少なく、200坪以上の敷地規模では半数以上の家に存在している。池もやや敷地規模の大きい家に多い。築山は11戸の内、8戸が200坪以上の敷地の家である。山野草は16戸の内12戸が200坪と250坪規模の敷地の家である。芝生も200坪以上の規模で多いようである。藤棚、流れ、手水鉢、などは少数で傾向は分からない。生活施設の洗い場はほぼ半数でどの規模の家にも見られるが、特に100～150坪規模で多い。ゴミ焼却場は傾向がつかめないが、物干しは、100坪、150坪、200坪に14戸の内11戸が集中している。井戸は200坪以下に湧き水は250坪以上の敷地規模の家に集中しているのも特徴的である。

以上、結論として敷地規模に関わらず庭園設備は存在しているが、敷地規模の大きい家で



図一 建物配置と境界、及び作業庭・空き地



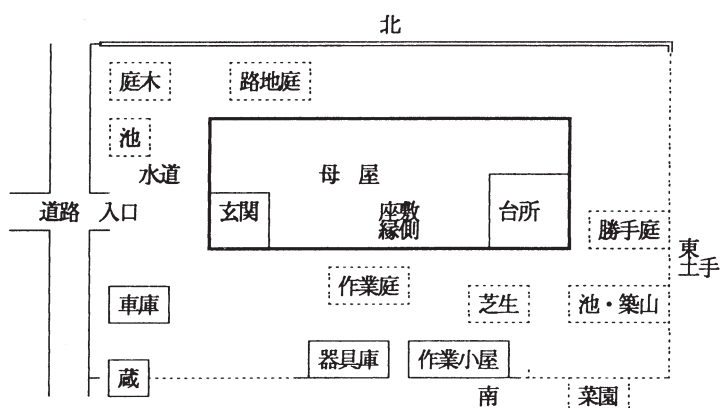
図一 2 農家敷地コ型の庭園化模式図

は築山、庭石、池などが見られることが多く、山野草はあまり規模の大きい家には見られない。花壇、盆栽鉢物は敷地規模と関係していない。庭園趣味の面積を必要とする部分が敷地規模の大きい家と関係し、また、育成の労力の大きさが中間規模の敷地の家と関係し、花壇や盆栽鉢物は面積を選ばないものであることが、以上の傾向と一致して判断される。また、生活設備の面では敷地規模が大きくなれば湧き水の自然条件をも敷地内に含むことができると考えられ、物干しなどは建物内部、軒先などが使われ、戸外で労力が大となるものは、敷地規模大の家に存在しないことの理由と考えられる。

生活設備と庭園設備との相互関係であるが、何らかの生活設備のある家が41戸、庭園設備のある家が54戸であり、ほとんどで両者の施設が存在している。生活設備が物干しや洗い場など建物内部でも補完できる点で、山村のゆとりのある敷地の中に散漫な形で生活や趣味の設備が存在しているといってもよいであろう。

2. 建物の配置と庭園設備

「研究Ⅰ」⁽¹⁾で建物配置の形態として、この地区では母家と附属施設で構成される7つの



図－3 庭園設備の配置の事例（調査番号 No. 1）

型を見出しているが、①母家だけ、あるいはこれに直列の＝型、②母家に並列した＝型、③母家に直角に配置したL型、④並列の＝型に直列した＝型、⑤＝型あるいはL型に直角に配置されたコ型、⑦L型の角に小附属施設の配置されたL'型、⑦より以上に複雑な型である。農家に古くから必要とされた作業庭は多く母家に南面してある場合が多く、玄関も母家の南側に造られることが多い。この地区では地形的に西に向かって傾斜しており、西向きに面した母家も多い。様々な配置型が見られるが、これは基本的に母家を中心にして、周囲に様々な位置と向きで附属建物が加わった配置であり、庭を囲む建物配置ではなく、開放的な配置と言える。建物が全面で境界の外壁になることはなく、建物から離れた境界は、そのまま外部に開放されるか、自然の外壁があるか、生け垣などの境界施設が造られるか、いずれかである。建物配置が農家の必要から伝統的な配置を踏襲していることが多いと考え、母家と母家に南面した作業庭の関係は持続し、作業庭をある程度、中心にした附属建物の配置が想定される。7つの型は境界、母家、作業庭、附属施設の配置として前頁の図－1に示す関係図式が想定される。こうした建物配置では母家だけの場合でも、四方に空き地ができることになる。母家と附属施設で作業庭が挟まれる場合にも、附属施設の一方の外壁が境界となる場合、やはり、四方に空き地ができることになる。附属施設の一方の外壁が境界とならない場合でも、附属施設の背後は生活空間としては無用であるので、四方か、三方に空き地が生じる。

図－2に示すように模式的な建物配置の空き地に庭園設備、生活設備が配置される場合、設備の配置によって異なる利用が行われる場所となる。作業庭は元来から農家にあるものだが、花壇や庭木が玄関に隣接している場合、玄関の美観として前庭（玄関庭）となる。池・築山は座敷に面して鑑賞されるよう造られ、座敷庭となる。座敷が縁側を経て南の作業庭に面し、附属施設が正面に無い場合に作業庭の全体または一部が庭園化して表庭あるいは主庭となる。また、座敷がその反対に面している場合は裏庭となる。普通の住宅では、裏庭は勝手庭となるだろう。生け垣と母家の隙間の通路沿いに樹木・草花を植栽し、路地庭となる。また、台所の出入り口付近に戸外の物干しやゴミの焼却などの生活設備を配して勝手庭となる。この近くに、菜園があれば便利である。子供のいる家族は遊びの設備が大概是勝手庭か、

作業庭に置かれる。この他の空き地に家族のそれぞれの趣味による利用が行われ、花壇、山野草、庭木などで占められる場所ができる。また、菜園は周囲の畑に連続し、隣接する用水路から水が取り込まれて池を作ることもあり、背後の土手が築山の代わりとなることもある。対象地区では、南あるいは西に母家の正面が向かい、正面に玄関がある場合が多いので、作業庭あるいは主庭及び、玄関庭は西または南にある。裏の座敷庭は東または北に位置し、路地庭、勝手庭は東または西に互いに対面して位置する。勝手庭に菜園が接続することが多い配置となるであろう。

実際の実例として図－3に示すと、西に玄関があり、その横に小さな池のある前庭があり、南に回ると土面の作業庭が器具庫、作業小屋と座敷の間にある。そこから東に水田土手を利用した築山と下段に池があり、池には滝があって水が落とされている。築山にはツツジなどの植物と石が配置させられている。その横の母家の角が台所となり、勝手庭として物干し場などに使われている。西の入口から建物の北に回り込むと路地庭の植え込みがあり、さらに奥には裏庭の座敷庭になっているらしい。

各家ごとに敷地内の建物と境界の間に植え込みや花壇があり、前庭、裏庭（座敷庭）、路地庭、作業庭、勝手庭として機能的に作られている。ただ、機能毎に敷地の区分が明確だったり、境界となる柵のようなものがあることは殆ど見られない。周囲の境界も設備として作られている場合もあるが、土手がそのまま境界となり、しかも庭園の築山に利用されていることも、調査対象の63戸の内7戸あった。表－4には前庭、作業庭、裏庭にはどのような庭園施設が設置されることが多いかを示した。前庭に花壇がある家は16戸、池・築山のある家が6戸、庭木のある家が26戸、庭園施設の無い家が14戸である。入口、玄関の通路に沿って庭園化が行われ、特に花壇が特徴的である。作業庭については、何もない家が25戸と半数を占めており、農家庭として性格を維持している。しかし、残りの半数は庭木が17戸にある他、花壇5戸、池・築山5戸と美化、庭園化が行われている。庭園化できない理由として建物の間に作業庭が置かれている場合が相当見られることである。裏の座敷庭には21戸に見出されたが、裏のため存在が不明なこともあるので、もっと多く設置されているはずである。7戸に池・築山が見られ、16戸に庭木があり、静かな裏の座敷、隠居部屋からの庭園の眺めを楽しむことができるであろう。

この地区の傾斜は西に傾き、西の敷地下段に開けた眺望が得られ、東が土手となって眺望が閉鎖されている。母家と玄関の向きの多くは南であるが、西である場合（これをこの地域では「谷なり」といっている）⁽⁹⁾も2割以上見られる。南北の幹線道路に面した敷地入口は西または東になりやすく、母家の向きも道路に平行して西向きとなるか、南の玄関に曲がって入っていくことになる。東西方向の枝線の道路自体が少ないが、南側が道路に面した場合は敷地入口が玄関の向きと直面した配置となる。北側の道路が敷地入口となっている場合は僅かである。

3. 庭園設備と境界

敷地の境界については研究Ⅰを参照されたいが、敷地のいずれの方向とも設備有りとな設備無しとの割合がおよび3対2となっており、境界設備としては生け垣、石垣、ブロックのいずれかとなっている。境界設備が無い場合、境界の状態は、隣家の建物、庭木、土手、道、畑、川などである。隣接地の土地利用も、境界設備の無い境界の状態と同様の隣家の建物、土手、

道、畑、川などであり、隣接地の土地利用が道路である場合に、何らかの境界設備をする場合がほとんどであり、田、畑、隣家では境界設備は半分程度、行っている。これに対して、土手に接している場合は境界設備を設けない場合が多い。対象地区の傾斜方向が西向きで、母家の向きも西または南向きとなり、水田の間に敷地があると、東の土手が母家の背後で斜面を直面させ、西の土手は敷地から下方で見えないことになる。西の方向は眺めが開け、日照の当たる方向となるので、境界は却ってそれを妨げることになると考えられ、南と西には境界設備の有る家は無い。東側の土地は、母家との間に距離があれば、その斜面は丁度、築山として眺めることができ、生け垣、石垣を設けている家がわずかにあるが、殆ど境界設備が行われていない。

東側が土手となっている15戸の内、境界を設けず、池、築山がつくられている家は3戸であり、庭木となっている家も3戸であるが、この内の2戸は石垣、生け垣の境界設備が設けられている。他は路地庭が4戸で、内3戸は境界設備が無く、1戸のみ生け垣であり、建物で境界設備の無い家は3戸、勝手庭で石垣が設けられているのは1戸、不明1戸である。東の土手に対して、池、築山、庭木が存在している家は母家の向きが西向きであり、路地庭、勝手庭、また、建物となっている8戸は、母家の正面が南で、東は母家の側面で敷地の余地が余らないために広がりのある庭園とはなりにくいためと考えられる。

4. 玄関と境界入口と庭園設備の関係

母家の玄関が南または西側の正面につけられている家は、51戸、側面は5戸、北側あるいは東側が5戸であり、圧倒的に玄関は母家の正面にある。これに対して境界の入口は、母家の玄関が正面につけられている家の内、27戸は母家の側面の側から22戸が正面の側に、2戸が裏側につけられている。側面または、北側あるいは東側に玄関のある家は、側面か、裏側が半々である。境界の入口は敷地が道路に面している側であり、母家は日当たりのため、南側、または西側に向き、伝統的な農家の間取りで正面に玄関が置かれる配置となる。境界入口に門のある家は2戸と極めて少ない。境界の入口部分と玄関の前庭部分は、それぞれ美観が考えられ、庭園設備が行われることが多い。玄関が正面、境界入口も正面で、通路が接近する場合は、入口部分と玄関前の美観が連続することになるが、正面が玄関の場合が4戸、側面及び裏側が4戸である。一方、敷地の広い家が多く、この場合は入口と玄関とは同じ側にあっても通路に距離があり、それぞれで庭園設備が行われる。この他に正面が玄関の場合で境界入口に庭園設備のある家は29戸、側面が玄関の場合で1戸である。玄関の前庭に庭園設備のある家は15戸で、正面に玄関のある場合だけに見られる。正面には作業庭があり、玄関も作業庭から入る場合が51戸の内、48戸と圧倒的に多いことが、玄関前庭に庭園を設備しにくくしている理由である。玄関が正面の真中でなく、片側によっている場合、あるいは作業庭の片側を庭園としている場合に玄関前庭の庭園設備が行われることになる。この15戸の他に、玄関入口から離れて、作業庭の前面に庭園設備のある家は22戸である。作業庭が庭園化されない家の多くは、作業庭が建物で囲まれた空間となっている場合である。境界入口に建物がある場合にも、入口に庭園を設備することはできない。玄関前及び境界入口の庭園設備の種類はほとんどが庭木であるが、次いで花壇が境界入口で8戸、玄関前で5戸、連続して2戸で、ほとんど、正面に玄関のある場合である。まれに、池、築山が見られる。

表一 2 庭園部分と庭園設備

庭園設備	前玄 関 庭庭	主作 業 庭庭	裏座 敷 庭庭
計	57戸	51戸	21戸
池・築山	6	5	7
庭 木	26	17	16
花 壇	16	5	1
芝 生		1	1
盆 栽	1		
無 し	14	25	

表一 3 庭園設備・戸外生活設備と建設年代

建設年代	回 答 数 戸	庭 園 設 備								生 活 設 備				
		庭 花	山 野	池	築 山	藤 棚	芝 生	テラス	敷石	物干し	焼却場	舗装	洗い場	井戸
10年未満	5	6	4	4	4	2	2	4	1	1	2	5	5	1
10～20	6	7	2		2	2		2	2		2	4		1
21～30	11	9	2	1	2	3	1		1	2	1	1		4
31～65	5	4			1			1				1	1	1
66～300	3	2	1											1
計	30	28	9	5	9	6	3	6	4	3	5	11	6	2

山村農家生活と庭園設備

1. 庭園・生活設備の建設年代

庭園設備、生活設備の設置の年代についての回答は30戸である。表一2に示しているように、その各戸毎に一番古く建設された設備の年代で10年未満前、11～20年前、21年～30年前、31～65年前、66～300年前に分けると、5戸、6戸、11戸、5戸、3戸となり、21～30年前を中心にして分散している。各設備毎に見ると、庭木がほとんどの家にあって古い物は1戸だけで300年前である。21～30年前の植栽が多く、近年にも多い。花壇も古い物があるが30年前以降、特に近年に建設されたものの割合が多い。これは池、築山、芝生、テラスなどの庭園設備にも言えることである。農家の庭が30年前以降、より趣味的部分の割合が大きくなっており、近年になってその傾向は顕著になっているといえるだろう。一方、生活設備の建設年代では1戸だけであるが、井戸が150年前のものが最も古い。しかし、他の生活設備はほとんど30年前以降のものであり、洗い場は21～30年前の建設が多く、物干し、ゴミ焼却場は20年前以降と近年の建設がほとんどである。特に舗装はすべて近年であり、車庫の建設時期と一致して自動車の出入りと関連していることが推定できる。居住年、母屋、蔵などの付属施設の建設年の古さと対比して考察すれば、庭の趣味的な利用や生活設備の建設は新しいものであり、敷地内に建物が配置され、それ以外は空き地としての庭であり、農作業、生活の多機能の複合した利用が行われている。庭木、井戸などわずかに趣味、生活の設備が加えられていたものが、30年前以降、趣味と生活が重視され、生産の場から快適な居住の場に変質している傾向がうかがえるのである。

2. 庭園設備の建設主体

各庭園設備の建設主体、建設方法を表一3に示している。業者に頼む庭園設備は庭石、池、流れ、灯籠、手水鉢、築山、庭木であり、専門的技術を要するものが上げられている。しかし、自前で家族の誰かが建設する場合も多く、庭石の移動や石組など技術や機材が必要となる工事に業者に頼まず、行っている場合もみられ、特に庭木については業者に頼むより自前でやることの方が多い。花壇、芝生、山野草などはほとんど家族自前の建設である。自前の

表一 4 庭園設備の建設主体

建設主体	庭園設備	庭木	花壇	山野草	芝生	藤棚	池	築山	庭石	灯籠	手水鉢	流れ	テラス	噴水
	計	54	26	17	10	5	16	10	24	11	4	4	4	1
前からある		5	2	1	1	1	3	4	4					
建設主体不明		6	5	1	3	5	4		3	2		1	2	
家族の建設	夫妻	33	6	13	7	3	5	3	10	5	1	3	2	1
	父	8	9		1									
	母	1	1	1	3	1	2	2	2	1	1			
	子他	4	4	1	1									
建設方法	自分で	21	14	8	5	4	4	3	5	4	2	1	1	1
	○のみで	⑫	⑨	⑤	④	③	②	③	②	③	①		①	
	購入で	12	4	1	1		1		2					
	○だけで	④	①						①					
	貰って	4	4	3										
	○だけで		②	②										
	採取で	13	3	5	1	1	1		2	1	1	1		1
	○だけで	③	①	③	①									
	業者に	10		2			5	2	12	5	2	2	1	
	○だけで	⑦		①			⑤	②	⑩	⑤	②	②	①	

注、○内の数字はそれのみの単独の方法で建設した戸数

場合は材料を得ることから始めなくてはならないが、その方法は購入か、採取か、他の人から貰うかである。山野草は採取で得ることが多い。花壇の草花は購入によるか、貰うかである。庭木の場合は購入と採取が半々である。庭石の自前の例はわずかであるが、購入と採取の両方が見られる。

家族の建設の場合に家族の誰が主体となるかであるが、表一 4 にあるように夫であることが多い。施工として石などを扱う専門的な庭園設備の建設は家によって父が行っている場合が見られるが、他のすべての場合に夫である。また、庭木、庭石、築山、池など以前から既にあるという先祖の誰かが作ったという家も見られる。植物の植栽は庭木では夫が多いが、妻、母の女性が建設主体となることもある程度の割合であり、花壇については妻が多い。しかし、山野草は夫が圧倒的に多い。ここで明らかなことは、庭園設備が庭木など古く歴史性を持ったものがあること、自前の技術と道具を有して庭園設備を建設できる家が相当あること、家族で技術的能力と趣味によって建設が分担されていることであった。

3. 庭園・生活設備と庭の利用

庭の利用と利用主体との関係については、既に研究Ⅱで取り上げている。ではその利用は庭園・生活設備のいずれで行われるのか。農作業と収穫物乾燥は作業庭で行われる。菜園利用は菜園が存在しているはずである。洗い場の利用も洗い場がなくてはできないので、洗い

表—5 庭の利用と程度及び夫婦庭園趣味

	回答数 55	利用程度				夫婦の庭園趣味との相互関係						
		有 □	多 ◎	中 ○	少 △	庭木	盆栽	園芸	菜園	庭園	生花	夫 妻
農 作 業	36	4	15	13	4				□			28 4
収 穫 乾 燥	30	2	8	14	6							16 4
洗 い 場	27	6	13	5	3							4 18
洗濯物干し	45	9	35	1								1 35
遊 び	17	3	10	3	1							1 1
付 き 合 い	9		5	4								4 5
園 芸	28	5	12	10	1			□			□	8 9
庭 園	23	3	9	10	1	□				□		16 3
菜 園	22	3	10	9					□			6 13
動物飼育	10	2	7	1								5
他	2		2									
		趣味回答 計55				40	17	14	19	10	26	
		夫				28	9	6	2	2	3	
		妻				1	2	4	7	2	14	

表—6 庭園部分と庭園設備・戸外生活設備の相互関係

庭園部分・地割	庭園設備					生活設備					庭の利用						
	芝庭	花山	流庭	灯手	築藤	洗井	湧水	用水	遊物	ゴミ	舗	農収	洗濯	遊び	つぎ	園芸	菜園
	野池	石敷	水	鉢	山	い	き	水	び	干	焼却	作	物	い	あ	芸	園
	生木	壇草	れ	石籠	鉢	場	戸	水	路	場	し	業	燥	場	し	び	い
作業庭	□									□	□	□	□	□	□	□	□
前庭	□	□	□		□	□										□	□
主庭	□	□	□	□	□												□
裏庭	□	□	□	□	□	□	□	□	□								
路地庭		□	□	□													
勝手庭						□	□	□	□	□	□		□	□	□	□	□
菜園																	□
花壇	□																□
駐 車										□	□	□					

場を利用すると洗い場があるの回答は28戸と31戸であるが、重複しない回答を総計すると40戸となる。井戸、湧き水、用水路なども洗い場となることを考えると、洗い場とそれに代わるもののある家は36戸である。池は19戸にあり、庭園用でもあるが、溜池として洗い場にも利用できるの、7戸を加えて43戸である。洗い場を利用して、以前は洗濯、炊事なども行われたであろうが、現在は農機具、野菜などの洗浄が考えられる。洗い場の利用が主婦、母、嫁の女性が多いことを考えれば、野菜洗いを行うことが主となるのであろう。洗濯物干しの

利用は46戸が庭で行うとしており、利用主体はほとんど主婦と女性中心である。物干しの施設があるという回答は14戸で大きな差があり、設備としては恒久的なものとは意識されていないようである。つきあいに利用するのは10戸で多いとはいえないが、別に意識しなくても、入口から開放的な庭の場合、庭先が立ち話の場所となることは十分に考えられる。普通は形式ばったつきあいは玄関から座敷となるが、庭先から縁側に親しいつきあいが展開していることが考えられる。子供のいる家は庭が遊び場となり、遊びの設備を行うことがある。17戸が子供、孫が遊びに利用しているが、遊び場の設備を行っているのは1戸だけで、ほとんど設備はなく、広場として利用されていることが考えられる。自動車の利用は質問していないが、車庫、入口の舗装は自動車のために必要な設備である。自動車がほとんどの家に普及していることを考えれば、車庫や舗装はすべてが行っているわけではない。舗装を行っている家は7戸であり、設備もなく空き地や屋根がけの場所に駐車し、通行にも格別の舗装がない家も相当多いことが判断できる。

園芸で利用する上で、花壇、山野草、盆栽、鉢物などの設備が対応していると考えられる。これらに関連した回答を寄せた58戸に対して、花壇、山野草、盆栽、鉢物いずれかがある家は48戸、園芸利用を行っている人のいる家をふくめると50戸に達する。しかし、花壇のある家は27戸に対して、園芸利用を行っている人のいる家は28戸で、43戸で園芸利用を行うか、花壇があり、重複した回答は13戸とわずかである。花壇と山野草の関係は、いずれかあるが38戸に対して、重複は5戸とわずかである。また、花壇と鉢物・盆栽の関係も、いずれかあるが44戸に対して、重複は8戸とわずかである。園芸利用と鉢物・盆栽の関係は、いずれかあるが39戸に対して、重複は15戸とやや多くなる。園芸利用は、花壇、山野草、盆栽、鉢物のいずれかが該当すると考えられており、花壇、山野草、盆栽、鉢物が重複して設置されることは少ないということがわかる。

庭園としての利用は、庭木、庭石、築山、池、噴水、手水鉢、灯籠などの設備が行われることになる。しかし、庭園の利用は23戸あるのに対して、庭木の設置はほとんどの家にあり、53戸と逆転した数字となっている。実際に庭木が存在していても、庭園とは考えられていないようである。園芸利用と庭石の設置であるが、両者とも23戸で、いずれかあるが33戸に対して、重複は13戸とやや多くなる。灯籠のある家は10戸、手水鉢のある家は4戸であるが、庭石のある家といずれも重複している。築山のある家9戸も、8戸が庭石のある家と重複している。芝生のある家9戸も、7戸が庭石のある家と重複している。池のある家16戸も、12戸が庭石のある家と重複している。庭園の利用と花壇の設置は14戸で重複し、庭石の設置と同様である。庭石の設置と花壇の設置の重複も14戸で、庭園的設備として庭石のある家では、園芸的利用としての花壇の設置も同時に行われていることが多い。また、庭園としての利用は、庭石を設置することと同様に花壇を設置することとも考えられている。噴水、テラスなど洋風庭園に見られる設備は極めて少ない。

総 合 考 察

1. 農家敷地の庭園化

農家敷地において、農業生産の比重低下、都市的生活様式への変換は建物の配置や境界部

分の施設など敷地の形態にもこの変化を見出すことができる。生活様式の変換の一つとして庭園趣味の拡大を見出すことができ、調査地のほとんどで、敷地の庭園化を見出すことができる。しかし、農業生産を基盤とする農家で、以前の建物配置が全て変化してしまったわけではなく、農業生産の持続の中で、基本的な建物配置が維持されていることが明らかとなった。庭園化の実態は、基本的な建物配置の中で、その隙間の空間に庭園を設備するものであることが考察された。敷地内における隙間空間の条件の変化に対応して、座敷庭、路地庭、玄関前庭、勝手庭など、趣味と生活の実用のための戸外設備が行われ、敷地を現代的な山村生活の場として埋め尽くしていることが明らかとなった。一方で、作業庭も維持されており、空き地として多様な利用が行われるとともに、部分的に縮小して庭園化も行われており、農家庭からの移行状態にあることも明らかとなった。

2. 庭園趣味の拡大

山村においても余暇時間増加、老後生活における趣味生活の拡大と個性化による多様化が見られ、家族の中にも、趣味の相違や明確となり、共同部分が少なくなっている。各家族内で夫、妻の立場でも庭園趣味としては共通性を見出すことができるが、その内容は相違しており、敷地の庭園化の中で家族内の棲み分け利用が見られ、これが、また、庭園化の多様な展開をもたらしていることが考察される。一方、山村住民において庭園趣味が一般化していることは、山村の自然の豊かな環境条件と家族共同の敷地の中で、趣味の展開を容易にしているためであり、共通の話題となることで地域文化的な広がりが生じるためである。

庭園趣味の展開によって、農家敷地に庭木、庭園、園芸と花壇、菜園が見られるが、その配置形式は趣味の内容によって特徴づけられている。庭園は自然風の形式と考えられている場合が多いが、これは空間に仕切りが無く、意図的に外部の眺望とつながり、また、建設がその家族によって時間をかけて行われていることによって、形式にとらわれない自由で敷地の条件に適合してできた形態で、自然風と意識されると考えられる。山村農家の庭では自然さとくつろぎが庭の特徴であり、眺めと美しさのために植物の豊富さと庭の形式的美しさが加えられ、くつろぎの中に生活と自然の交流の場が実現しているということである。

3. 山村生活と庭園

敷地の利用は、家族それぞれの立場、農業、居住、趣味の多様な要求のもとに行われ、その結果、庭の機能分化をもたらし、敷地計画のもとでの地割りといった計画的土地利用ではないけれども、自然発生的な敷地の地割りによって、玄関前庭、作業庭（主庭）、裏庭、前庭、路地庭、勝手庭といった庭園配置が見出されることにもなったのである。こうして分化した戸外敷地を家族の中で使い分けが行われており、個々の農家の建物周囲の庭の形態は家族の機能的な空間利用を体現したものと眺めることができる。

農業従事のもとで必要となる作業庭の維持と縮小、作業庭を縮小して作られた庭木、築山、池などの庭園、玄関前の主婦の作る花壇、物干し、洗い場の見られる勝手庭、子供の遊具の置かれた場所、菜園、裏の座敷庭の池などの庭園、路地庭の通路と庭木と利用目的に適合した空間が作られている。しかし、従来の農家庭の機能と骨格が存在し、その複合のもとで現代の農家庭の機能的関連性が見出せる。すなわち、作業庭に見られた機能分化しないで多元的な機能を持つ空き地の形態が作業庭の存続と勝手庭との連続の範囲に見出され、しかも機能的空間の相互に仕切りが作られていないこと、入口、玄関、縁側の家族や訪問者の通路、

車の出し入れ、物資の搬入など動線空間の維持、水の利用における池、洗い場などの連続性と同時に地形などの利用（斜面の築山、眺望）などの自然条件との結合などの実態がこれを示している。広い敷地、周囲の自然環境がこうした空間を区分しないで、多様な利用を受入れ、型にとらわれない自由な形式の自然風の庭園をつくり出してきたと考えられる。

一方、山村生活の都市化は、水道の整備、燃料の変化などに現れており、流れや井戸（地下水）の自然水利用の減少、木材、森林の利用の減退があり、敷地と周辺自然環境の連続性の重要性や循環的關係が薄れており、庭園趣味の展開がこうした自然環境との関係の新たな再生となることが期待される。

お わ り に

今回の調査地も山村の一例でしかない。今後の多くの山村集落の農家庭の調査が行われて、今回、見出した農家庭の実態以外のタイプが見出されるだろう。山村集落の立地条件、社会的条件は多様であり、調査範囲を広げる場合に調査方法自体の検討も必要となる。さらに、山村の農家庭から、農村の農家庭、一般の住宅の庭との比較研究に到達したいと考えている。この研究のまとめが刺激となって今後の課題へ展開することを期待している。

謝辞、調査の体制の説明は「研究Ⅰ」のおわりに述べているのでここでは省略するが、調査時期から最後のまとめが遅れてしまったことをおわびしたい。

要 約

山村農家の敷地と農家の庭園趣味について、研究Ⅰでは、敷地内の建物配置、境界はいくつかの型が見られた。研究Ⅱでは、農家の趣味生活で、家族構成員のそれぞれが庭園を楽しんでおり、庭園の植物の豊富な種類と維持管理や栽培の自前の実行などから、その趣味の程度は高く、庭園の役割として、生活の実用を含めた心理的楽しみの効果が複合的に期待されていることが明らかになった。

本論文では、農家庭が新たな敷地計画のもとに作られることは少なく、元来の農作物のための庭を別として敷地境界と建物配置によって生じる空き地が庭園建設の場に展開してきたことを考察する。また、農家が農業主体から住宅主体に敷地を利用するように変化しており、この敷地の機能面の変化と庭園化の関連を考察していく。

敷地に庭園を作る空間的条件は建物の配置によって決まり、境界と建物間の隙間の部分の庭園化、空き地として作業庭に使われた部分の庭園への転換によって、20年から30年前に庭園の建設が行われている。この庭園の建設は趣味生活の拡大が原因となっている。敷地内の庭園部分は玄関の前庭、作業庭、表の座敷庭、裏の座敷庭、路地庭、勝手庭に区分できる。作業庭は半数が座敷庭として庭園化され、半数が作業庭として維持されている。裏の座敷庭は古くから作られることもあったが、庭園趣味と生活のゆとりの中で楽しみとして、表の座敷庭まで作られることが多くなったことが考察される。勝手庭は物干し、洗い場など設置されている。周囲の境界と建物との隙間に路地庭が作られている。玄関前庭、作業庭（主庭）、裏庭、前庭、路地庭、勝手庭といった庭園配置に分化した戸外敷地を家族構成員で使い分け

が行われていることが考察される。以上から、従来の農家庭の機能と骨格が存在し、これに現代生活と趣味に適合した庭園建設が行われていると結論づけられる。

キーワード：農家，庭園，山村

参 考 文 献

1. 伊藤精悟・山田隆信，山村の農家庭に関する研究Ⅰ，信州大学農学部紀要第28巻2号，1991
2. 伊藤精悟・佐々木邦博・小山泰弘，農家庭に関する研究，信州大学農学部紀要第26巻1・2号，1990
3. 伊藤精悟・山田隆信，山村の農家庭に関する研究Ⅱ，信州大学農学部紀要第30巻2号，1993
4. 中尾佐助，花と木と文化史，岩波新書，1986
5. 馬場多久男・伊藤精悟・田中 誠，山間地水田土手の野草管理と利用に関する研究，信州大学農学部紀要第28巻2号，1991
6. 信州大学農学部・長谷村，山村の生活を楽しむ，1991
7. 田村 剛・森欽之助，小住宅の庭園設計，1951
8. 長谷村誌刊行委員会，長谷村誌第2巻自然編・現代編，1994
9. 戸草ダム民俗等調査委員会，奥三峰の歴史と民俗，長谷村教育委員会，1994